

終える命、

つなぐいのち

國
森
康
弘

第9回 戦争の冷たい死

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。

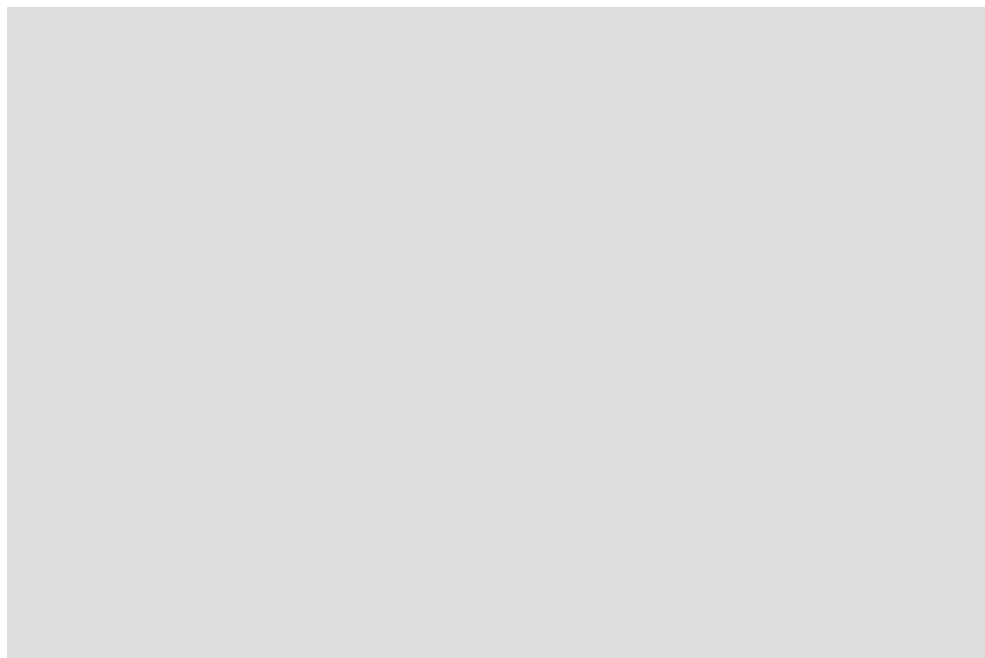
上から

▶ 占領当局、米軍に対する自爆攻撃の現場。 | イラク |

▶ 米兵による大規模な虐待拷問事件が発覚したアブグレイブ刑務所。大半が無実の市民だったという。50度近い炎天下、父との面会を願って長時間、並ぶ少女たち。 | イラク |

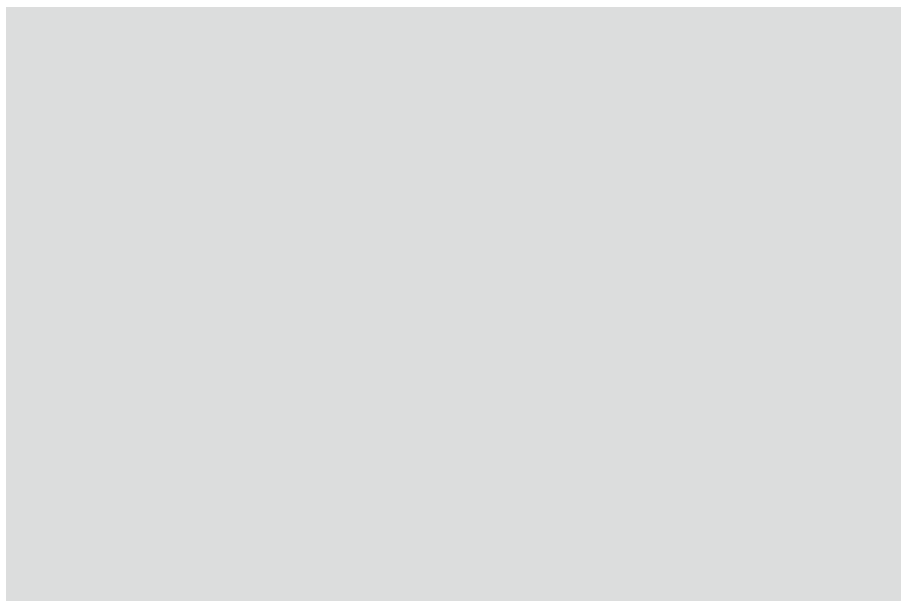
▶ 失業率9割。食べていくために武装勢力、民兵組織に入る若者も少なくない。 | ソマリア |

▶ 自衛隊が派遣された町、サマワ。このころから、日本人が「テロ」の標的にされ始める。 | イラク |



戦争という
人災がなければ、
もつと生きられた。

戦争、内戦が続いて医療機関も機能せず、
死に迫られている子ども。 | ソマリア |



「子どもを助けようと近づいたんだ」と話すメダットくん。 | イラク |

ち

よつとした爆発音のあと、赤い乗用車から子どもの泣く声が聞こえた。救い出そうと多くの住民が駆け寄ったが、車内に人影はない。泣き声が響くなか、突然その車が爆発した。

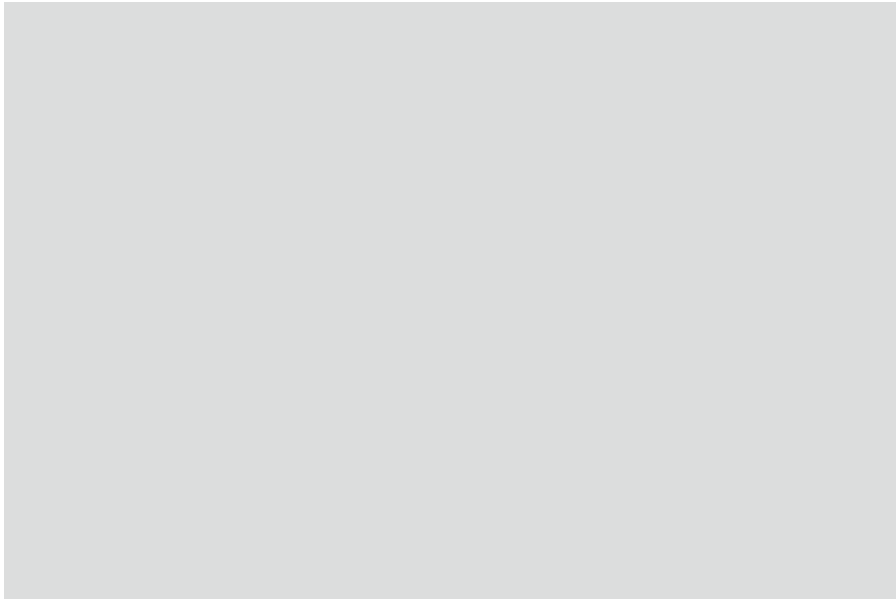
2004年夏のある昼間、イラクの首都バグダッドで起きた事件で、市民30人超が死傷。現場には、巻き込まれた少女のサンダルとかじった跡のあるリング、細かく飛び散った肉片らしきものが散乱していた。

車から10メートルほどの距離にいて、左足を骨折、腹部にも破片が突き刺さった少年、メダットくん。彼を含む何人もの市民が、爆発の少し前、米軍車両2台と赤い車が連なって現場に停車し、その後、米軍車両だけが走り去ったのを目撃していた。アラブ系メディアは目撃証言として米軍の関与を伝えたが、BBCやCNNなど欧米系メディアはそのことに触れなかった。

日本も米国側として、自衛隊を派遣したイラク戦争。のちに、当時のブッシュ米大統領は、「誤った情報」に基づいて始めた戦争、と認めた。

ソマリアやスーダンなど紛争の激しい地でも、きれいな水や十分な食べ物が手に入らず、栄養失調や感染症で死んでいく子どもたちに出会った。

戦争は、天災とは異なる「人災」だ。それがなければ、



爆発した赤い車のそばで。 | イラク |

この子たちはもっと生きられた。勉強をして夢を叶えたり、誰かを好きになって子や孫を授かったり……。戦争は、そんな「いのちのつながり」をブチリと断ち切ってしまう。

国内では、日本軍兵士としてアジア戦線の最前線に立たされた、100人近くの戦争体験者のおじいさんたちに話を聞いた。戦友は被弾してばらばらになり、愛する家族は原爆で悶え死んだ。一方、「敵国」では捕虜を刺し殺して、住民に乱暴した。鬼、悪魔とののしられながら、他国の人のいのちのバトンをリレーを断ち切った。

取材を通じて、人間は誰しも戦争によって「悪鬼」にさなりうる、と思い知った。それほどまでに、私たちの心はもろくて、弱い。そして、生まれた憎しみは連鎖し、増幅する。だからこそ、戦争を遠ざけ続けねばならない。「武勇」では、子どもたちを守れない。大切な人を守るのは、人の心のもろさに対する自覚と恐れから湧き出る、平和を求め導く不断の心――。

世界中の誰もが、各々授かった命をまっとうして、いのちを「次」につないでいける。そんな世を願って、あたたかな看取りと天寿まっとうの取材を重ねている。

〈2003～5年に撮影〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。